フレーベルの恩物研究（第19報）
——作業具について——

荘　司　泰　弘

Study of Fröbel's Gifts (No.19)
über die Beschäftigungsmittel in Spielgaben

Yasuhiro SHOUJI

(Received September 27, 2002)

はじめに——フリードリッヒ・フレーベル（Friedrich Wilhelm August Fröbel 1782-1852）は、幼稚園の生みの親、幼稚園教育学の祖、フレーベル「遊具」(die Spielgabe) の考案者として知られている。フレーベルが子どもの遊び道具を編集して考えだした「作業具」(das Beschäftigungsmittel) と合わせて、遊具を使用して初めてフレーベルの「教育遊具」(das Erziehungsspielzeug) となる。現在、フリードリッヒ・フレーベル博物館のあるバート・ブランケンブルクの地に、「自己教授と自己教育へ導く直観教授のための施設」という名称の教育遊具製造販売施設がフレーベルによって1837年に創設された。ブランケンブルクの施設でフレーベルは、「積み木」(der Bauklotz) として知られる、創造活動によって知識を取り入れる遊具を考案し、様々な作業によって心中のイメージを表現する素材を作業具として編集したのである。遊び➡作業➡労作という方向性を考えていたフレーベルにとって作業は幼児期後期と児童期前期の子どもに不可欠のものであったわけである。

作業具は、子どもの活動衝動に表現傾向を与えるために、フレーベルが編集した素材と遊びであり、1837年「幼児期と青少年期の作業衝動を育むための施設」で完成した。形態分析により、外界環境の知識を提示する遊具に対し、内界の創造的活動衝動の自由表現を援助することを目的としている。家庭読本『母の歌と愛撫の歌』で紹介された手や指の遊び、活動遊びなどのリトミック、動植物の飼育栽培などの**身体**による表現に始まり、粘土、豆と棒、色板、ボール紙の造形などの**立体**による表現、折り紙、織り紙、切り紙、貼り紙などの**面**による表現、組み板、組み紙、網置き、針金造形、線描などの**線**による表現、刺し紙、縫い紙などの点による表現がある。すなわち、子どもの内面世界に形成された外界のイメージをシンボル化し、創造的活動衝動によって外界に表現する教育遊具が作業具と見なされうる。作業具も立体➡面➡線➡点という系列を持ち、

点において遊具と作業具は結合する。作業具は遊具と並行して用いられることが重要である。造る、切る、貼る、縫う、折る、織るの各自由選択分野において、遊具で得た内面のイメージを作業具が創造的活動衝動によって表現するわけである。作業具の一番最初の立体は子どもの身体そのものである。したがって、動植物の飼育栽培、散歩、リトミック、母と愛撫の歌の遊戯も作業となる。

作業具には箱に入っているものがあり、色板、色棒、色粒の3種類の作業箱がある。第3遊具から色粒の作業箱までが立方体分解の系列となっている。作業には、「結合」(die Vereinigung)と「変形」(die Umwandlung)の2系統がある。点と棒と面を結合する作業の系列、線や平面や立体を変形する作業の系列になる。実際には刺し紙で穴を開けた穴を色糸で縫い、色糸でデザインされた紙片を箱状の立体に加工したりと、様々な変形が試みられた。色彩、言葉、粘土遊びは絶えず習慣的に行うことになっており、刺し紙で使った台紙に色インキで線を引いたり、作業は様々に応用されたことが特徴的である。カイルハウ学園でも作業は採り入れられていたのだが、フレーベルの心中では、作業教育の意義が次第に広がっていき、「フレーベルは私達が共同討議で完成した教育施設の計画をマイニンゲン公爵に提出したが、ヘルバ国民学校計画には、単に普通の意味で教えるばかりでなく、肉体労働や指物細工や編み物や板紙細工なども教育手段として利用されることになっていた。授業時間の半分が授業に当てられ、残り半分は仲間と一緒に作業することになっていた」[7]と、バーロップが報告しているように、後のキンダーガルテンでの作業品目の大半がヘルバ国民学校計画の中に見られる。

ヘルバ国民学校計画の中に見られる作業

a) 紙の造形

α) 種々の形に折ること

β) 種々の形に切りとること

γ) 象形を取り出すこと。個別労作

a) 紙から切り取ること

b) 切った紙を分類し、貯えること

c) 貯えた紙片を仮綴すること

d) 手本に線を引くこと

e) 形の製図

δ) 紙の編細工

ε) 紙で幾何学的な形態を造ること

b）厚紙の造形

α）糸巻き遊びや置き遊びのための厚紙の小箱

β）厚紙の星

γ）鉱物入れの箱

δ）厚紙の小箱、蓋のない単純なものと蓋付きのもの

ε）羽ペン入れ

ζ）羽ペン立て

η）卓上の丸い敷物

θ）単純な針箱や道具箱、および組み合わせ式の針箱や道具箱、家の模型、蝶の箱など

ι）道具や果実を入れるいろいろなカゴ

c）木の造形

α）木材の彫刻（遊びと授業）

β）板を割る事（遊び）

γ）エンドウ豆や小さな棒での造形（遊びと授業）

δ）立方体状の立体から幾何学的な物体を刻む

ε）遊び、その他の学習のために、各種の遊具を刻む

a）小舟の彫刻

b）風車

c）破砕機

d）鳴子式風車、あるいは壺形鳴子

e）搗砕機

d）針金の造形

α）鎖の製作

β）小さいカゴ作り

e）粘土造形

α）幾何学的な物体や結晶の模型を刻む

β）地球表面の部分の模型作り

γ）模型作り一般

f）蒐集の計画

α）図形

β）形態

γ）色彩のある形成物

δ）自然科学の教材

} 学科の実技として

a）石

b）カブトムシ

c）チョウチョ

d）植物

e）苔類

f）栽培植物

g）卵

h）剥製の鳥

g）模写

α）言葉の模写

β）音符の模写

h）彩色によるもの

i）撚糸や紐などによるもの (17)

遊具と作業具の構成について、フレーベルは、『この使用の手引きは、次にしなければならない内容を示していない、1本のブナの木になっています。お母さん、私達は協力しながらも、各自が個別的に、子どもにこの箱を教えるべきであり、各自が個別的にとくと調べるべきなのです。というのは、自ら知った同様の事柄を、全体のイメージへと、慎重に、注意深く、少しずつ、進めるのはあなただからなのです。――最初の小さなこと、重要なことだけを克服したり、生き生きとした言葉の欠乏によって私が説明を止めたものを克服したならば、――その時こそ、大きな喜びがもたらされることでしょう』(23-a) と記述している。すなわち、遊具と作業具は、1本のブナの木のような立体構造になっているわけである。さらに、フレーベルの「子どもの愛するお母さん、私達は今、あなたの静かな部屋で、あなたが作った種々の形態へと進みましょう。現れた

り、消えたり、互いに調和したり、見えたり、一定したりするようなものを、あなたにどんな部門なのか、どの3つの主要な全体像なのかを、それぞれについて適合させてみましょう。というのは、すぐにまた、二重のことが私達にわかるからです。第1：一定した適切な同じ形態に種々の評価、直観、関連を認めるもの。同時に、種々の主要な全体像を構成するか、種々の分野を内部に同様に構成するもの。第2：繰り返される種々の形態に、同等の評価や関連を認めるもの。2つのものによって、種々のもの自体の内に、分けられた全体についての部分を結合し、自ら完結する統一へと、再び結合するための媒介部分を再生成するのです」[23-b]という記述から、枝や幹との関連が伺える。葉として様々な提示をするフレーベルの3形式は、各形式が枝である諸法則と対応している。すなわち、生活形式は「部分的全体」(das Gliedganze)の法則に対応し、美形式は「対立調和」(die Vermittlung der Gegensätze)の法則に、認識形式は「生命合一」(das Lebenseinigung)の法則に対応しているわけである。

遊具と作業具の違い――遊具は、「応用したり、使用したりするために、自分の前に置かれた全ての部分を利用し、何一つも度外視されず、何一つ使用されないものがないようにする」ことが重要であった。反対に、作業具は、様々な組み合わせや、制限のない使用をしてこそ表現素材としての意義を持つと考えられる。遊具は外的なものを内的にする役割を持ち、作業具は内的なものを外的にする役割を果たすことが特徴的である。したがって、内的なイメージを表現するために「素材」が多くなっている。

フレーベルは、「新しい遊具は前に使った遊具を決して疎遠にするものでなく、それどころか、新しい遊びとまだ平行して、以前の遊びと交互に継続することは、次の新しい遊具の応用を容易にし、思慮深いものにし、発展的なものにする。さらにまた、次の新しい遊びの練習は、以前の遊具の使用をさらに生き生きと、さらに意味深く、さらに賢く、さらに自由に使うようにならせるのです」[14] と記述し、「以前の遊具」と「新しい遊具」とを併用して用いることを勧めているが、作業具は単発的に使用することが特徴である。もちろん、散歩や飼育栽培など継続して行う活動もある。自筆の遺稿、『今まで完成した建築遊び、配置遊び、状態遊びの関係の概要』[4-b](資料2参照)において、「色彩遊び、粘土遊び、言葉遊びは習慣的に行い、なおかつ、この事物の各々に横たわる自主的な諸法則が展開するものに従って行う。活動遊びは子どもにとっては、まずボールから球体から……その後に子どもから、という二重の基点を持つが、子どもの四肢の構造を確固とさせるものによってさらに続けて養成してください」とフレーベルが記述しているように、特に、粘土や彩色の作業は習慣的にすること、最初の活動遊びは「ボール」(der Ball)や球体を使ってすることをフレーベルは勧めている。フレーベルが色彩遊び、粘土遊び、唱歌を、作業具や遊具と別格扱いして用いることは、「純粋な音響による表現としての芸術は音楽であり、主として唱歌です。純粋な色彩による視覚に対する表現としての芸術は描画です。量の形成や型どりによる空間的な表現としての芸術は造形である。描画と造形に対して、結合的仲介者として

現れてくるのはデザインであるが、デザインは同等の権利で、線による純粋表現とも見なすことができ、だから、デザインは線による表現の優勢なもの、描画は面による表現の優勢なもの、造形は立体による表現の優勢なものに属している」[16-a]という記述を裏付けるものであろう。

作業具についての資料――出版して公にされた物として、フレーベルが永眠した1852年に2回に分けて記載された、「棒置き」[10] と、晩年にフレーベルが監修したと考えられる棒置きの手引書、『棒置き、あるいは、学校での子どもの最初の感情移入手段としての棒によるデザインと造形。フリードリッヒ・フレーベルの発展的、教育的陶冶方法での教科課程と学校の教科課程の結合。最も好ましいものを提供する実践的教師による家庭と学校、全ての母親達、教育者と教師のための本』[12]が1852年に刊行されている。また、棒置きの認識形式と考えられる論文、「リナはどのようにして読み書きを覚えたか」[31] が、『フリードリッヒ・フレーベルの週刊誌。全ての人間教育の友のための統一誌』(*Friedrich Fröbel's Wochenschrift. Ein Einigungsblatt für alle Freunde der Menschenbildung*) に連載されている。だが、他の作業具についてフレーベルが公にした論文はなく、ランゲ版に転載された、「子ども達の作業。折り紙のための手引き。指導的な大人達による的確な協力の下での5歳から7歳の子ども達のための発展的、教育的、愉快な、子ども達の自己教育作業」[22] という折り紙に関する論文も、『フリードリッヒ・フレーベルの週刊誌。全ての人間教育の友のための統一誌』に掲載されている。だが、同論文にはキンダーガルテンでの年少の子どもの作業については述べられていない。また、「子どもの生命と遊びを展開する全体としての活動遊び」[9] は、『同志と同一協力の下に活動している者のための日曜紙』(*Ein Sonntagsblatt für Gleichgesinnte und unter thätiger Mitwirkung derselben*) に掲載して公にされている。

自筆の遺稿として、『自らを相互に制約しているものとしての、それゆえに、生き生きとした遊具の部分としての、発展的、教育的遊びと作業と各遊具の全体像を与えてくれる、最も早期の、子どもへの配慮と養育の最初の段階から少年少女の年齢に至るまでのための、棒の適切な扱いと正しい使用に関するような存在と精神における感情移入手段としての棒置き。包括的下書き』[11] がフレーベル博物館に保管されている。遺稿として、「領域における創造者、創造的存在の人間。子どもに内在する早期の創造する力、創造性の展開。子どもの描画の喜び」[13] という描画に関する論文がある。自筆の遺稿の中に、『折り紙と切り紙のための手引き』[5] があるが、断片としてしか現存しておらず、ランゲ版にある「折り紙の手引き」は見あたらなかった。フリードリッヒ・フレーベル博物館には、刺し紙に関するオリジナルの資料、『刺し紙帳』[8] が保存されている。刺し紙に関する文章の断片が自筆の遺稿に、『いわゆる刺し紙の下絵について』[28] として残されている。その他、作業具に関する資料は、1837年の自筆遺稿として、『遊具と作業具についての不明瞭な企画の断片』[30]、1844年の自筆遺稿として、『フレーベルの子どもの活動方法、遊びの方法、作業の方法について』[29]、同じく1844年の自筆遺稿として、『フリードリッヒ・フレーベルの

今までよく知られ普及した遊具箱と作業箱を使用するためのより注釈的で案内的な言葉』[18]、『今まで大部分完成したフリードリッヒ・フレーベルの遊具箱と作業箱、作業具の全体的概要』[4-a]（資料1参照)、『今まで完成した建築遊び、配置遊び、状態遊びの関係の概要』（資料2参照)、『遊具や作業具の注文のための指物師レーンと他の請負人の請求書』[26]、『さぁ、私達の子ども達に生きよう。両親、保育者、主として教育する人達のために、特に、フリードリッヒ・フレーベルの提示した包括的な人間教育を小さな子ども達の養育施設に適用するための、より真実な人間教育の本物の目に見える基礎として、全面的、教育的、発展的な子どもの遊びと作業手段の全て』[24]などが保管されている。

日本での作業具――遊具と作業具で知られる一連の教育遊具は、フレーベルが子どもの創造的活動衝動を援助するために考案した「媒介物」(die Vermittelung）であることに特徴づけられる。子どもの内面の創造性を表現する素材としての作業具は、生命環境の豊かな園庭や散歩で得られた「生命に対する感動」を表現する役割を持っている。

残念ながら、わが国にはアメリカを経由した輸入版であったため、フレーベルの原典では、遊具ではない別系統の作業具が遊具として紹介され、作業具が遊具と混同されていた。第10遊具までしかない遊具が倍の20もあることになってしまったのである。本来、第10遊具までが第2遊具の立方体を分割した遊具であり、第2遊具から第10遊具は彩色されていない。以後、薄板状に分解、棒に分解、点に分解され、棒と点を結合して面に、面と面を結合して立体にする作業箱が続き、色彩が付加される。すなわち、立方体の分解は、面の結合をする作業箱によって立体へと再結合することになるわけである。薄板の作業箱、棒の作業箱、点の作業箱は遊具箱とは別枠で使用されることの正当性が導き出されるわけである。同様に、線を変形する作業具、平面を変形する作業具、立体を変形する作業具があり、変形の作業も別枠で行われる。第2遊具の立方体を分割する系列は、点に分解した作業箱で終了するとも考えられる。第1遊具から第10遊具までの遊具によって、外界の形態を内界に取り入れるだけではなく、並行して作業箱による活動が行われ、内界に形成されたイメージを確固たるものにすることが特徴的である。さらに、粘土や紙などの変形素材である作業具によって、内界に形成された生命賛歌のイメージを外界に表現することが意図されている。すなわち、内面世界と外面世界の調節、遊具による吸収と作業具による表現の媒介をする役割を作業箱に持たせていた言えよう。

第9遊具と第10遊具で枚数と形態が規定された薄板は作業具として、「薄板状のものに」分割、棒に分割、点に分割される。作業具の 面➡線➡点への分解は、次に結合への系列へ向かう。点➡線➡面 へと結合する作業具の系列とは別に、変形の系列として作業具の線を変形、面を変形、立体を変形する系列があると考えられるであろう。残念ながら、倉橋惣三（1882-1955）によって遊具と作業具が混同されて日本に紹介されている。第1類恩物――毬（第1恩物)、球と立方体と円柱（第2恩物)、第2類恩物――小立方体（第3恩物)、煉瓦形長方体（第4恩物)、三角

体（第5恩物）、半長方体と柱状体（第6恩物）、第3類恩物――平面的な置き並べ恩物（色板、長短の棒、金属製の全環と半環、豆）、第4類恩物――手技製作用材料恩物（紙、竹、粘土）と類別されたわけである。倉橋の分類はフレーベルの分類とは異なるものであった。

フレーベルのキンダーガルテン導入や恩物の使用方法が先行したため、ブレークはフレーベルの作業を、「恁ふ云ふ様な仕事をやらせて見た時にフレーベルは如何に子供達の手先きが其意思に從はず其目が不正確なる觀察をするものであるかと云ふ事を發見したので之れは何うしても補備練習をしなければならないと云ふ事に思ひ致り、紙を疊む事切ること糊で付ける事などから、切つた紙を編む事などを教え、網だの手下げ篭の様なものを作る様に教えた。此様なる手技をやつて居る間に圖畫や数學や幾何學を自然に覺える譯である。後には時々木でもつて色々のものを作らせる様な事もした」[2] と、単に巧緻性の練習として理解している。しかし、彼は表現素材としての作業を見落としていると言えよう。だが、フレーベルの教えを受けた実践家、ヘールヴァルトですら、「保育者が遊び衝動や作業衝動を刺激するための道具を持っているのは、期待に応えるためなのです。モザイク状に置く色の付いた板、絵の練習色とりどりの毛糸での縫い取り、色彩感覚の養成に役立つもの、図形置き、棒置き、環や紐置き、豆細工、造形、折り重ねなどの形状感覚を養成する道具など、他にも数感覚を発展する道具を持っているのです」[6]と記述している。彼女が作業具は子どもに刺激を与える道具とのみ理解していることは、フレーベルの理論が当時の保育現場に伝え切れていなかったことを裏付けるものであろう。だが、作業具とは遊具によって得た外界の情報を内面化し、内面で消化発酵したイメージを外面に表現するための素材であるとも考えられる。子ども達に表現の仕方を指導したり、教えたりすることは、子どもの自由な表現活動にはならないのではなかろうか。遊具や作業具による活動をフレーベルが、遊び（子どもの自由、自発的な内面の創造性を表現する活動）とした理由を考えると、指導や助言が入るはずがないのではなかろうか。また、後藤真造が、「手細工は恩物遊戯にひきつづいて行はしむるもので、その方法形式は異つて居るが、その教育上の効果としては、共に娯樂の内に知識感官筋肉を正確に働かしめ、注意觀察の力を増進し、藝術的技巧を養ふことに在るのである」[1] と理解している記述が示すように、日本において、フレーベルの作業具は正確さを養う手段、技巧を養う手段、芸術的能力を訓練する手段と考えられてきた。しかし、課業として作業を課してきた日本の保育は、子どもが心中のイメージを表現する援助を意図した作業の発想とは言い難い。すなわち、「楽しいこと」を第一条件にしたフレーベル思想とはかけ離れたものになってしまったわけである。作業は『幼稚園記』の時代から、「第十第十一乃至第十九ノ恩物ハ唯六歳及ヒ七歳兒女ノ等級ニノミ固有セシムヘシ而シテ第二十即チ各物假造戯器ノ恩物ト及ヒ圖畫ノ兒女記憶力ヨリ模寫シ漸ク其形像ノ何物タルヲ認許スヘキモノトノ如キハ是レ平均七歳ノ兒女等級に要求スヘシ、フレベル氏ノ創製シタル色紙縞紙厚紙木片濕豆糸金等ノ諸般ノ玩戯物品ハ外界各物ノ形像ヲ擬造シ以テ看官ヲシテ自ラ眞物想像ノ感覺ヲ生起セシムルノ精巧ニ至ラシムルヲ其目的トシ最モ要須ノ一課ナリ」[3]と記述されているように、課業として扱われてきた。幼稚園児の能力を

超えた内容であるとしつつも、『幼稚園法二十遊戯』では、第七恩物　置板法、第八恩物　置箸法、第九恩物　置鐶法、第十恩物　圖畫法、第十一恩物　刺紙法、第十二恩物　繍紙法、第十三恩物　剪紙法、第十四恩物　織紙法、第十五恩物　組板法、第十六恩物　連板法、第十七恩物　組紙法、第十八恩物　擢紙法、第十九恩物　豆工法、第二十恩物　模型法、と幼稚園での課業として扱ってきたわけである。課業となってしまっては遊びも楽しさを半減し、カイルハウやヘルバで行われていた少年の作業品目が幼稚園児に課されたという点は問題である。フレーベル自身は『人間教育』の中で、組み板、厚紙細工、木工、粘土の模造、線画を少年期の作業と明示しているのに、幼児に課せられたわけである。[16-b]恐らく、幼児期には平易な段階の作業内容が実施されていたと考えられるであろう。また、フレーベルの作業には系列や確定した順序がないことが見逃されていることについても示唆しておくことにする。確かに、1826年当時フレーベルは面によって制約された、既にできあがった立体を考察した後に、平面、線、点の考察へと『人間教育』の中で論を展開しているが[15]、遊具を分解する系列に関する記述であり、フレーベルは結合と変形による作業の分類だけを示唆していることから、作業具の系列を説明しているとは言い難い。フレーベルは子どもの表現衝動に合う作業を、子ども自身が選べるように配慮していたことは、課業として作業を子どもに課そうとした日本の発想とは別の立場であったことを裏付けるものであろう。

子どもの想像、創造活動を援助するための遊具であったが、日本では学校制度のカテゴリーでキンダーガルテンを理解しようとしたため、子どもの自己活動を援助するというフレーベルの発想が、子どもの活動を誘導するという倉橋惣三の発想へと変貌したと考えられるであろう。さらには、フレーベルの自己教育とは全く反対の発想、子どもの「指導」(die Lehre) という発想に差し替わっていったわけである。子どもの発達状態にとって、難しすぎる内容が扱われ、いかに達成課題に到達させるかという技術論や方法論が先行したとも考えられる。自由に楽しく遊びながら活動することが忘れられ、一斉に保育者の指示どおりに作業をしていた。賞罰を与えて、大人が望ましいと考える方向を設定するようになったことが特徴的であった。さらに悪いことには、フレーベル教育法が単なる遊びによる教育として理解され、子どもの創造性や想像性が無視された結果、遊具は単なる訓練器具や練習素材に堕落してしまったわけである。

フレーベルのキンダーガルテンは3歳から7歳の子どもを対象とし、最大50名まで受け入れ、3歳から5歳までと5歳から7歳までの子どもの「縦割り編成」方式を採っていた。水曜日と土曜日は9時から12時までの3時間、月、火、木、金曜日は、9時から11時と、15時から17時（冬季は14時から16時）までの4時間、1週に22時間の保育をしていたわけである。屋外で「集団遊び」「庭の作業」「ボール遊びや球技」をし、「豆の部屋」「縫う部屋」「組む部屋」「折（織）る部屋」「切る部屋」「刺す部屋」「描く部屋」「粘土の部屋」などの用途別の部屋があり、積み木、色板、色棒、色糸、色紙、豆、粘土などの各素材を使って作業をしていたようである。30分単位で作業をすることになってはいるが、良い天気の時などは予定は変更され、屋外の活動になってい

たし、5歳から7歳の子どもは各自の好みで作業を選んだり、好きなだけの時間作業を続けることができたという点は重要である。夏季は屋外で自然に親しみ、冬季は部屋での作業をすることが大切にされていたことが特徴的である。キンダーガルテンの「作業割り振り」を見ると、フレーベルの縦割り編成で各作業部屋を子どもが選ぶ発想と、日本の横割り編成で時間割に忠実に子どもを一斉に指導した発想の違いが明確になる。

夏季の作業割り振り	30分で1		冬季の作業割り振り
庭仕事	12	−	
物語や具体的な対話	6	6	物語や具体的な対話
組み立て	4	4	組み立て
集団遊び	6	6	集団遊び
粘土造形	2	4	粘土造形
編む	2	4	編む
ボール遊びや球技	2	2	ボール遊びや球技
		4	折る
		2	配置遊び
		2	色板でのデザイン(描画)
総時間数	17	17	(21−a)

	夏季				冬季		
	月曜	火曜	水曜		月曜	火曜	水曜
9−10半	物語や具体的な対話			9−10半	物語や具体的な対話		
10−10半	共同遊び			10−10半	組み立て	組み立て	色板デザイン
10−11半	休憩			10−11半	休憩		
11−11半	組み立て	組み立て	編む	11−11半	折る	折る	ボール遊び
11半−12	—	—	庭仕事	11−12半	—	—	共同遊び
12−12半	—	—	庭仕事	12−12半	—	—	配置遊び
15−16半	庭仕事	庭仕事	—	14−15半	粘土	粘土	—
16−16半	庭仕事	庭仕事	—	15−15半	共同遊び	共同遊び	—
16−17半	休憩	休憩	—	15−16半	休憩	休憩	—
17−17半	粘土	ボール遊び	—	16−16半	編む	編む	—
	木曜は月曜と同じ　金曜は火曜と同じ　土曜は水曜と同じ						(21−b)

1週で17時間の作業であるから、1日約3時間の作業になるわけである。しかし、1日の時間帯を見ると、9時から17時30分までの7時間30分の間に、3時間の作業をしていたことがわかる。2時間の休憩時間を引いても、2時間30分の自由な時間があり、休憩時間も自由な時間であると

考えると、4時間30分の自由な時間に対し、3時間の作業であったという点は重要である。作業も5歳から7歳の子どもは好きな作業を選べ、好きなだけの長さで作業できることから、フレーベルの「作業割り振り」は子どもにとっては有ってなきに等しいものであったとも考えられるであろう。手引き書の随所に見られる「小さな形態の総体」(das kleine Formen-Ganze)や、「小さな輪」(der kleine Kreis)という、フレーベルの用語で示される作業単位形式の発想は、どこから始めてもよい保育内容を意味していることが特徴的である。

作業具を遊具として誤紹介した経緯——1874年にマーレンホルツ＝ビュローはヘルマン・ゴルダマーとともに、『幼稚園。フレーベル主義教育法、遊具と作業具の案内書。フレーベルの著述とベルタ・マーレンホルツ＝ビュロー夫人の著述に則って』という2巻ものの全集を著した。第1巻『就学義務前の年齢のためのフリードリッヒ・フレーベルの諸遊具』[20]には、第1遊具から第2遊具の紹介の後、第3遊具を第1積み木、第4遊具を第2積み木、第5遊具を第3積み木、第6遊具を第4積み木とし、円柱体、半円柱体、¼の大きさにした三角柱、立方体で構成された第5B遊具を付け加え、第5積み木として遊具を類別している。しかし、マーレンホルツ＝ビューローとゴルダマーが第5B遊具と名付けた積み木の出所が論者には不明であった。フレーベルの遺稿にあった、球体や「円柱体」(die Walze)を分解する系列から試作したものではなかろうか。ルイゼ・フレーベル夫人が1860年にハンブルクで出版した『環と半環』(*Kreis und Halbkreis*)を紐解けば判明すると論者は考えているが、残念ながらフレーベル夫人の本は消失している。マーレンホルツ＝ビューローはさらに、第7遊具を四角形の置き板、第8遊具を直角二等辺三角形の置き板、第9遊具を「直角不等辺三角形の置き板」、第10遊具を「正三角形の置き板」、第11遊具を二等辺三角形の置き板、第12遊具を組み板、第13遊具を棒、第14遊具を全鐶と半鐶、第15遊具を紐、第16遊具を小石と貝殻と紹介している。すなわち、マーレンホルツ＝ビューローが遊具と作業具を混同してしまったのである。フレーベルの遺稿である『今まで大部分完成したフリードリッヒ・フレーベルの遊具箱と作業箱、作業具の全体的概要』(資料1参照)に書き残されているように、第7遊具から第10遊具もフレーベルは積み木として考えていたのである。マーレンホルツ＝ビューローが第7遊具から第16遊具であるとしたものを、フレーベル自身が作業具として記しているという点は重要である。マーレンホルツ＝ビューローが遊具と作業具を混同した原因は、フレーベルが実践的知識の奥義を口伝として、養成コースの生徒に分散して伝えてきたことにあると考えられるであろう。生徒達のノートや覚え書き、フレーベルとの書簡の中にだけ実践的な手引きが記されており、フレーベルの死後もルイゼ夫人やミッデンドルフによって、口伝方式が養成コースで受け継がれていたからである。わずか1年間の養成期間では十分に伝えきることができず、遊具や幼稚園教育学の思想は断片的にしか普及しなかったのではなかろうか。マーレンホルツ＝ビューローが著した第2巻『就学義務前の年齢のためのフリードリッヒ・フレーベルの諸作業』[19]も、子どもの表現衝動や創造的活動衝動を無視した内容であり、作業活動によ

る生命賛歌という肝心の目的が省略された単なる指先の訓練内容、段階を追った練習にすぎない無味乾燥な方法論になってしまった。

現場の混乱に気づいたマーレンホルツ＝ビュローは、13年後の1887年になって、『フレーベル主義教育法の理論と実践ハンドブック。フレーベル主義教育法の実際。保育案と115枚の図表をつけて』[27] を著した。遊具が第6遊具までであったこと、自分の全集で紹介した第7遊具から第16遊具は作業具であったとして出版したわけである。子どもの発達の筋道に沿うために遊具の系列があったこと、遊具が作業箱や作業具と自然有機体的に併用されてこそ効果を発揮することが重要である。1本のブナの樹木のような構成にした意味をマーレンホルツ＝ビュローが見落とした段階で、遊具は子どもの自由な使い方さえ許さないほど、類別され、段階づけられた20恩物になってしまった。日本には生命をテーマとしたキンダーガルテンの意図が伝わらず、皮相的な方法論や技術論が流れてきた責任は、女性の職場としてキンダーガルテンを利用した女性解放運動家マーレンホルツ＝ビュローにあるのではなかろうか。

合自然環境での使用――生命をテーマとするフレーベルにとっては、自然環境と接する屋外での活動が重要であり、遊具や作業具による活動が主な活動ではないことが特徴的である。むしろ、「季節や状況で、少年が家庭や学校での仕事を自由にできず、自分の力を自由に鍛えたり、発達させたりできない時があり、しかも、少年はどんな場合でも、何もせずにいられない。だから、少年時代には、あらゆる場合にも、屋内や室内での何か他の外面化する作業や表現を作らなければなりません。特に、機械的な仕事と言われているような、紙細工、厚紙細工、造形などは、少年の活動や少年指導の本質的な部分であり、また、労作は少年自身にとって極めて大切なものなのです」[16-c] とフレーベルが記述しているように、1826年当時のフレーベルは作業具を天候などの理由で屋外に行けない時の少年の屋内活動として考えていた。後に、労作浴として真の労作と造形の意義に気づくのだが、屋外の活動こそ本来の自然による生命教育の場であり、遊具や作業具での労作は副次的な活動とも考えられる。

日本ではフレーベルの遊具や作業具の使用方法が前面に出てきたが、むしろ、集団遊びや飼育栽培、散歩や子ども同士の関わり合いなどの屋外での自然との関わりにこそフレーベル教育法の真価があると見なされうる。子ども自身が生命との関わりを体験し、獲得した感動体験を再現してこその遊具であり、創造活動を通して体感した生命賛歌のイメージを表現するための作業具であるのではなかろうか。遊具や作業具は、自然の有する合自然性や有機性から生命を直観するための手段であるという点が重要である。

フレーベルが『母の歌と愛撫の歌』の中で紹介した手遊びも、一人で練習することを想定したものではなく、二人や大勢で楽しむ遊びであり、母と子のような共同感情を表現する関係で遊ぶことが前提になっている。『母の歌と愛撫の歌』で紹介された、「塔の風見」[25-a] (Hähnchen auf dem Thurme)、「お終い」[25-b] ('s ist all= all)、「草刈り」[25-c] (Grasmähen)、「ニワトリさん

おいで」[25-d] (Hühnchenwinken)、「ハトさんおいで」[25-e] (Täubchen winken)、「小さなサカナ」[25-f] (Fischlein)、「縦に横に」[25-g] (Langweis= kreuzweis)、「クッキー作り」[25-h] (Patsche= Kuchen)、「トリの巣」[25-i] (Vogelnest)、「花籠」[25-j] (Blumenkörbchen)、「ハトの家」[25-k] (Taubenhaus)、「親指はスモモ」[25-l] (Däumchen und ein Pfläumchen)、「親指の挨拶」[25-m] (Däumchen neig dich)、「親指でひとつ」[25-n] (BeimDäumchen sag ich Eines)、「指ピアノ」[25-o] (Fingerklavier)、「無邪気な姉妹」[25-p] (Die Geschwister ohne Harm)、「塔の上の子ども達」[25-q] (Die Kinder auf dem Thurme)、「小ウサギ」[25-r] (Das Häschen)、「オオカミとイノシシ」[25-s] (Der Wolf, Das Schwein)、「小窓」[25-t] (Das Fensterlein)、「窓」[25-u] (Das Fenster)、「炭焼き小屋」[25-v] (Die Köhlerhutte)、「大工」[25-w] (Der Zimmermann)、「小さな橋」[25-x] (Der Steg)、「中庭の門」[25-y] (Das Hofthor)、「庭の門」[25-z] (Das Gartenthor)、「小さな園丁」[25-あ] (Der kleine Gärtner oder das Gieskännchen)、「車屋」[25-い] (Der Wagner)、「建具屋」[25-う] (Der Tischler)、「騎手と良い子」[25-え] (Die Reiter und das gute Kind)、「店屋と少年」[25-お] (Der Kaufmann und der Knabe) などの手遊びに見られるように、フレーベルの遊具は、遊具を使った指導や、遊具による機能訓練が主たるねらいではない。むしろ、遊具や作業を媒介とした感情交流、共感、信頼という共同感情を表現する関係において、子どもの生命への思いが尊重されることが特徴的である。遊具や作業を通して、「遊ぶ大人」の思いと子どもの思いが相互に交流することに主眼があるとも考えられる。すなわち、フレーベルの遊具は有機的で生命躍動的人間関係の中で使用することが前提となっているわけである。

フレーベルは遊具や作業具で子ども達を教育しようとしたのではなく、自然に子ども達の教育を委ねたのであり、自己に内在する自然と合一することが自己教育の道であったわけである。自己に内在する自然、すなわち、自然の有する合自然性と子ども達を結びつける役割を遊具と作業具が果たすからこそ、自己教育手段なのである。

有機的で合自然的な人間関係は、屋外の自然生命環境を模倣することによってもたらされる。「子どもの生命と遊びを展開する全体としての活動遊び」と題して、フレーベルが『同志と同一の協力のもとに活動している者のための日曜紙』に掲載した論文には、「紐付きのボールから現れた活動遊び、同時に身体と四肢の一定の陶冶の観点での活動遊び」という内容がある。第1遊具のボールを持って屋外でする集団リトミックであり、[9-a] 遊具は屋外でも使われていたことがわかる。知的な認識活動よりもリトミック、活動遊び、手遊び、飼育栽培などの作業にみられる「身体による表現作業」が、キンダーガルテンの時期の子どもの活動であり、保育室での活動よりも屋外での活動が多かったことは当然の帰結となる。十分に遊び、身体で内面の創造性を表現してこそ、遊具や作業具の活動に生命が表現されると考える。室内の保育よりも屋外の保育の方が、子どもに「環境に関わる力」が要求されるのだが、現在の日本では、ピアノの弊害として、リトミックが室内のものになってしまい、活動遊びや共同遊びが保育者中心の室内のマスゲームになってしまったと考えられるであろう。フレーベルが表現遊びとして紹介した一連の遊び、

「カタツムリ」(das Schnecklein)、「水車遊び」(Mühlenspiel)、「車輪」(das Rad)(9-b)、「輪の遊戯、星の遊戯、花の遊戯、花冠の遊び」(das Kreis , Stern=, Blumen= und Kronenspiel)(9-c)、「旅行遊び」(die Wanderspiele)(9-d)、「純粋な歩行遊び」(die reinen Gehspiele)(9-e)を見ても、保育者が「遊ぶ大人」として、積極的に屋外活動をしており、周囲の自然環境が子ども達の生活に溶け込んでいることが理解できる。発表会や運動会が終わると消えてしまうような、大人が設定した一時的活動ではなく、周囲の自然環境が提供した、日々の遊びの中に継続して息づいている活動であること、四季折々の様々なヴァリエーションを持つことが前提となっている。すなわち、柔軟な発想で周囲の生命環境に関わる場合に、遊びが自己教育になり、遊具が自己教育手段になる機会が増加すると考えられる。屋外での活動という「多様で変化に富む環境」があってこそ、室内で遊具で遊ぶという安定した環境が自己教育効果を発揮するわけである。フレーベルが自己教育のための施設をキンダーガルテン(子どもの園)という名称に統一し、屋外での作業や散歩などの自然との関わりを尊重した理由がここにある。

引用・参考文献

1. 教育者としてのフレーベル研究
   後藤眞三:目黒書店:1930年6月20日 pp. 102. L. 9−L. 11
2. フレーベル伝
   Break. H. W:岩村清四郎:神戸頌栄保母伝習所:1918年12月25日 pp. 50. L. 5−L. 11
3. 幼稚園記巻之一
   Douai. A:関 信三:東京女子師範学校:1876年7月 pp. 22. L. 5−pp. 23. L. 3
4. *Allgemeine Übersicht der bis jetzt zum größen Teil ausgearbeiteten Spiel= und Beschäftigungskästen und =mittel von Friedrich Fröbel* a. 2/4 Seit b. 1/4 Seit
5. *Anleitungen zum Papierfalten und Ausschneiden*
   Friedrich Fröbel : Nachlaß Friedrich Fröbel 101 : Akademie der pädagogischen Wissenschaft der DDR : 1851
6. *Anwendung der Vier Grundsätze Friedrich Fröbel's auf die Erziehung in der Familie, im Kindergarten, in der Bewahranstalt und in der Schule, sowie im täglichen Leben*
   Eleonore Heerwart : H. Kahle. Eisenach : 1884 S. 36. Z. 2−Z. 9
7. *Aus Fröbel's Leben und erstem Streben. Autobiographie und kleine Schriften*
   Friedrich Fröbel Wichard Lange : In : *Friedrich Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften* Band 1
   Th. Chr. Fr. Enslin. Berlin : 1862 S. 6. Z. 4−Z. 10

8. *Ausstechheftchen*

Friedrich Fröbel : Nachlaß Friedrich Fröbel 100 : Akademie der pädagogischen Wissenschaft der DDR : 18??

9. Bewegungsspiele, als ein Ganzes aus dem Leben und Spielen des Kindes entwickelt

Friedrich Fröbel : In : *"Kommt, laßt uns unsern Kindern leben ! ". Ein Sonntagsblatt für Gleichgesinnte und unter thätiger Mitwirkung derselben* : Nachlaß Friedrich Fröbel : Friedrich Fröbel Museum. Bad Blankenburg : Anstalt zur Pflege des Beschäftigungstriebes der Kindheit :1838

a. II Band No. 26. 1838 und 1840 S. 197. Z. 13−S. 207. Z. 49

b. II Band No. 25. 1838 und 1840 S. 187. Z. 37−S. 194. Z. 68

c. II Band No. 26. 1838 und 1840 S. 193. Z. 1−S. 194. Z. 84

d. II Band No. 24. 1838 und 1840 S. 181. Z. 11−S. 187. Z. 27

e. II Band No. 26. 1838 und 1840 S. 195. Z. 61−S. 197. Z. 12

10. Das Stäbchenlegen (1)(2)

Friedrich Fröbel Bruno Marquart : In : *Zeitschrift für Friedrich Fröbels Bestrebungen zur Durchführung entwickelnd erziehender Menschenbildung zu allseitiger Lebenseinigung* : Kinder= Beschäftigungs= Anstalt. Bad Liebenstein : 1852 : Drittes Heft. Februar und März 1852 : Viertes Heft. April 1852

11. *Das Stäbchenlegen als Einführungsmittel in das Wesen und den Geist, wie in die angemessene Behandlung und den rechten Gebrauch des, für die früheste und erste Stufe der Kinderbeachtung und Pflege bis zum begonnenen Knaben= und Mädchenal ter, von mir gegebenen entwicklnd= erziehenden Spiel= und Beschäftigungs ganzen und der einzelnen Spielgaben, als wechselseitig sich bedingende, darum lebenvollen Glieder desselben. Ein Umfassende Skizze*

Friedrich Fröbel : Nachlaß Friedrich Fröbel 140 : Akademie der pädagogischen Wissenschaft der DDR : 18??

12. *Das Stäbchenlegen oder : das Bilden und Gestalten durch Stäbchen als erstes Einführungsmittel des Kindes in die Schule. Verknüpfung des Lehrganges der Lehrganges der Schule mit der entwickelnd= erziehenden Bildungsweise Friedrich Fröbels. Ein Buch für die Familien und die Schule, allen Müttern, Erziehern und Lehrern freundlichst dargeboten von einem praktischen Schulmanne*

Johannes Stangenberger : Kinder- Beschäftigungs- Anstalt. Bad Liebenstein : 1852

13. Der Mensch ein schaffendes Wesen, ein Schöpfer in seinem Wirkungskreise. Entwickelung der schaffenden, der Schöpferkraft schon früh im Kinde. Des Kindes

Zeichenlust

Friedrich Fröbel : In : *Friedrich Fröbel's Wochenschrift. Ein Einigungsblatt für alle Freunde der Menschenbildung* : Nachlaß Friedrich Fröbel : Friedrich Fröbel Museum. Bad Blankenburg : Der Kinderbeschäftigungs Anstalt, früher in Blankenburg, jetzt in Bad Liebenstein bei Eisenach : 1850 : Nr. 19. Montag, den 13. Mai 1850 : Nr. 20. Montag, den 20. Mai 1850

14. Die Fortentwickelung des Kindes und das sich entfaltende Spiel mit dem Balle

Friedrich Fröbel Wichard Lange : In : *Die Pädagogik des Kindergartens. Gedanken Friedrich Fröbel's über das Spiel und die Spielgegenstände des Kindes* : In : *Friedrich Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften* Band 2 : Th. Chr. Fr. Enslin. Berlin : 1874 S. 110. Z. 12−Z. 21

15. Die Kunde der Formen und Gestalten, und diese in ihrer hoheren Bedeutung und Beziehung

Friedrich W. A. Fröbel : In : *Die erziehenden Familien. Wochenblatt für Selbstbildung und die Bildung Anderern* : Nachlaß Friedrich Fröbel 105 : Akademie der pädagogischen Wissenschaft der DDR : Der allgem. deutschen Erziehungsanstalt in Keilhau : 1826 : Sonnabend～10～den 11. März 1826

S. 157. Z. 26−S. 158. Z. 33

16. *Die Menschenerziehung, die Erziehungs= , Unterrichts= und Lehrkunst, angestrebt in der allgemeinen deutschen Erziehungsanstalt zu Keilhau ; dargestellt von dem Stifter, Begründer und Vorsteher derselben, Friedrich Wilhelm August Fröbel. Erster Band. Bis zum begonnenen Knabenalter*

Friedrich Fröbel : Allgemeinen Deutschen Erziehungsanstalt. Keilhau : Commission bey A. Wienbrack. Leipzig : 1826 a. S. 285. Z. 26−S. 286. Z. 10 b. S. 296. Z. 17−S. 297. Z. 7

c. S. 42. Z. 1−S. 43. Z. 4

17. Die projectirte Volks= Erziehungs= Anstalt zu Helba bei Meiningen

Friedrich Fröbel Wichard Lange : In : *Aus Fröbel's Leben und erstem Streben. Autobiographie und kleine Schriften* : In : *Friedrich Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften* Band 1 : Th. Chr. Fr. Enslin. Berlin : 1862 S. 416. Z. 13−S. 417. Z. 33

18. *Einige erläuternde und einführende Worte zum Gebrauche der bis jetzt bekannten entwickelnden und erziehenden Spiel= und Beschäftigungskästen Friedrich Fröbels*

Friedrich Fröbel : Nachlaß Friedrich Fröbel 55 : Akademie der pädagogischen

Wissenschaft der DDR : 1844

19. *Fr. Fröbels Beschäftigungen für das vorschulpflichtige Alter*
Hermann Goldammer : In : *Der Kindergarten. Handbuch der Fröbelschen Erziehungsmethode, Spielgaben und Beschäftigungen. Nach Fröbels Schriften und den Schriften der Frau B. v Marenholtz= Bülow* Band 2
Carl Habel. Berlin : 1874

20. *Fr. Fröbels Spielgaben für das vorschulpflichtige Alter*
Hermann Goldammer : In : *Der Kindergarten. Handbuch der Fröbelschen Erziehungsmethode, Spielgaben und Beschäftigungen. Nach Fröbels Schriften und den Schriften der Frau B. v Marenholtz= Bülow* Band 1
Carl Habel. Berlin : 1874

21. *Friedrich Fröbel's entwickelnd= erziehende Menschenbildung (Kindergarten= Pädagogik) als System. Eine umfassende, wortgetreue Zusammenstellung*
Hermann Pösche : Hoffmann und Campe. Hamburg : 1862
a. S. 442. Z. 18−S. 446. Z. 32 b. S. 449

22. Kinderbeschäftigung. Anleitung zum Papielfalten. Eine entwickelnd= erziehende und unterhaltend= belehrende Kinderbeschäftigung für Kinder von 5 bis 7 Jahren und darüber, unter eingehender Mitwirkung von leitenden Erwachsenen
Friedrich Fröbel : In : *Friedrich Fröbel's Wochenschrift. Ein Einigungsblatt für alle Freunde der Menschenbildung* : Nachlaß Friedrich Fröbel : Friedrich Fröbel Museum. Bad Blankenburg : Der
Kinderbeschäftigungs Anstalt, früher in Blankenburg, jetzt in Bad Liebenstein bei Eisenach : 1850 :
Nr. 37. & 38. Montag, den 16. & 23. September 1850 : Nr. 43. & 44. Montag, den 28. October & 4.
November 1850 : Nr. 45. & 46. Montag, den 11. & 18. November 1850 : Nr. 49. & 50. Montag, den 9. & 16. December 1850

23. *"Kommt, laßt uns unsern Kindern leben ! "Anleitung zum Gebrauche der in dem Kindergarten zu Blankenburg bei Rudolstadt ausgefährten dritten Gabe eines Spiel= und Beschäftigungsganzen, des einmal allseitig getheilten Würfels : "Die Freude der Kinder." in Zweihundert Sachdarstellungen und ebensovielen Reimliedchen ; für Mütter und Pflegerinnen des früheren Kinderlebens, besonders für Vorsteher und Vorsteherinnen Gehilfen und Gehilfinnen an Kinderpflegeanstalten jeder Art zu Stadt und Land ; namentlich an solchen Anstalten, welche sich zeitgemäß zu*

entwickelnden "Kindergärten" erauf bilden wollen, von Friedrich Fröbel. "Gar hoher Sinn liegt oft im kind'schen Spiel." Nebst zwei gedruckten und zwei lithographischen Übersichten

Friedrich Fröbel : Anstalt zur Pflege des Beschäftigungstriebes der Kindheit und Jugend, Blankenburg bei Rudolstadt : Nachlaß Friedrich Fröbel 224 : Friedrich Fröbel Museum : 1844

a. S. 35. Z. 14−Z. 29 b. S. 9. Z. 28−S. 10. Z. 10

24. *Kommt, laßt uns unsern Kindern leben ! Das Ganze der allseitig erziehend entwickelnden Kinderspiele und Beschäftigungsmittel als die echte sichtbare Grundlage wahrer Menschenbildung für Eltern, Kinderpfleger und überhaupt Erziehende, besonders auch zur Anwendung in klein Kinderpflege- Anstalten übersichtlich dargestellt von Friedrich Fröbel*

Wilhelm Middendorff : Nachlaß Friedrich Fröbel 54 : Akademie der pädagogischen Wissenschaft der DDR : 18?? :

25. *Mutter= und Koselieder*

Friedrich Fröbel Johannes Prüfer : Ernst Wiegandt. Leipzig : 1911

a. S. 12. Z. 1−Z. 11 b. S. 9 c. S. 10 d. S. 13 e. S. 14 f. S. 15
g. S. 16 h. S. 17 i. S. 18 j. S. 19 k. S. 20 l. S. 21 m. S. 22 n. S. 23
o. S. 25 p. S. 26 q. S. 27 r. S. 28 s. S. 33 t. S. 34 u. S. 36
v. S. 37 w. S. 38 x. S. 39 y. S. 40 z. S. 41 あ. S. 42 い. S. 43
う. S. 45 え. S. 46 お. S. 47

26. *Rechnungen des Tischlermeister Löhn und anderer Liefaranten für die Herstellung der Gaben und Beschäftigungsmittel*

Friedrich Fröbel : Nachlaß Friedrich Fröbel : Friedrich Fröbel Museum : 1837

27. *Theoretisches und praktisches Handbuch der Fröbelschen Erziehungslehre. Die Praxis der Fröbelschen Erziehungslehre. Mit einem Plane und 115 lithogr. Tafeln*

Bertha Marenholtz= Bülow : Georg. H. Wiegand. Kassel : 1887

28. *Über das sogenannte Bilderausstechen*

Friedrich Fröbel : Nachlaß Friedrich Fröbel 99 : Akademie der pädagogischen Wissenschaft der DDR : 18??

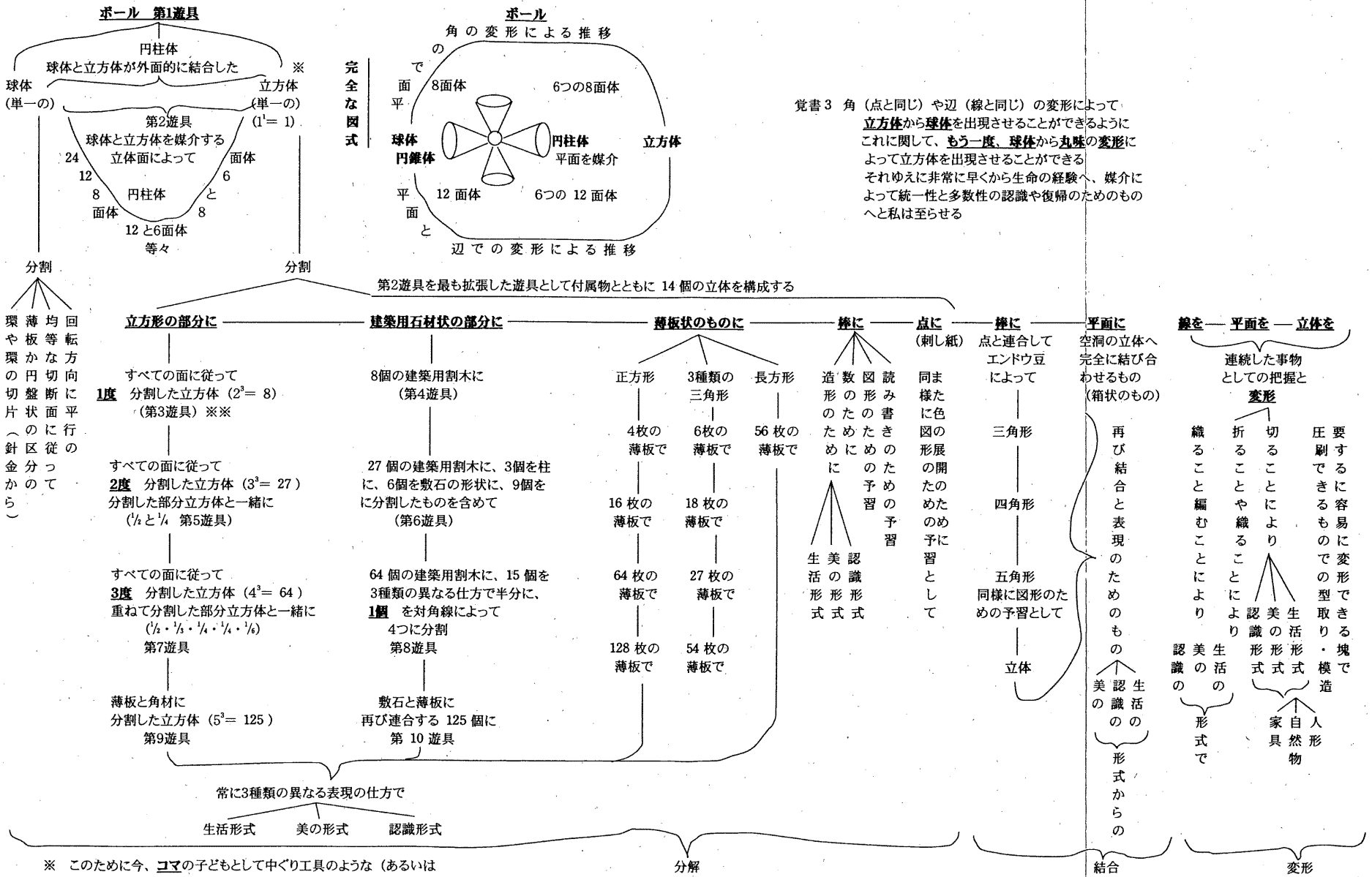
29. *Über Fröbels Kinderbetätigungs= , Spiel= , und Beschäftigungsweise*

Friedrich Fröbel : Nachlaß Friedrich Fröbel 56 : Akademie der pädagogischen Wissenschaft der DDR : 1844

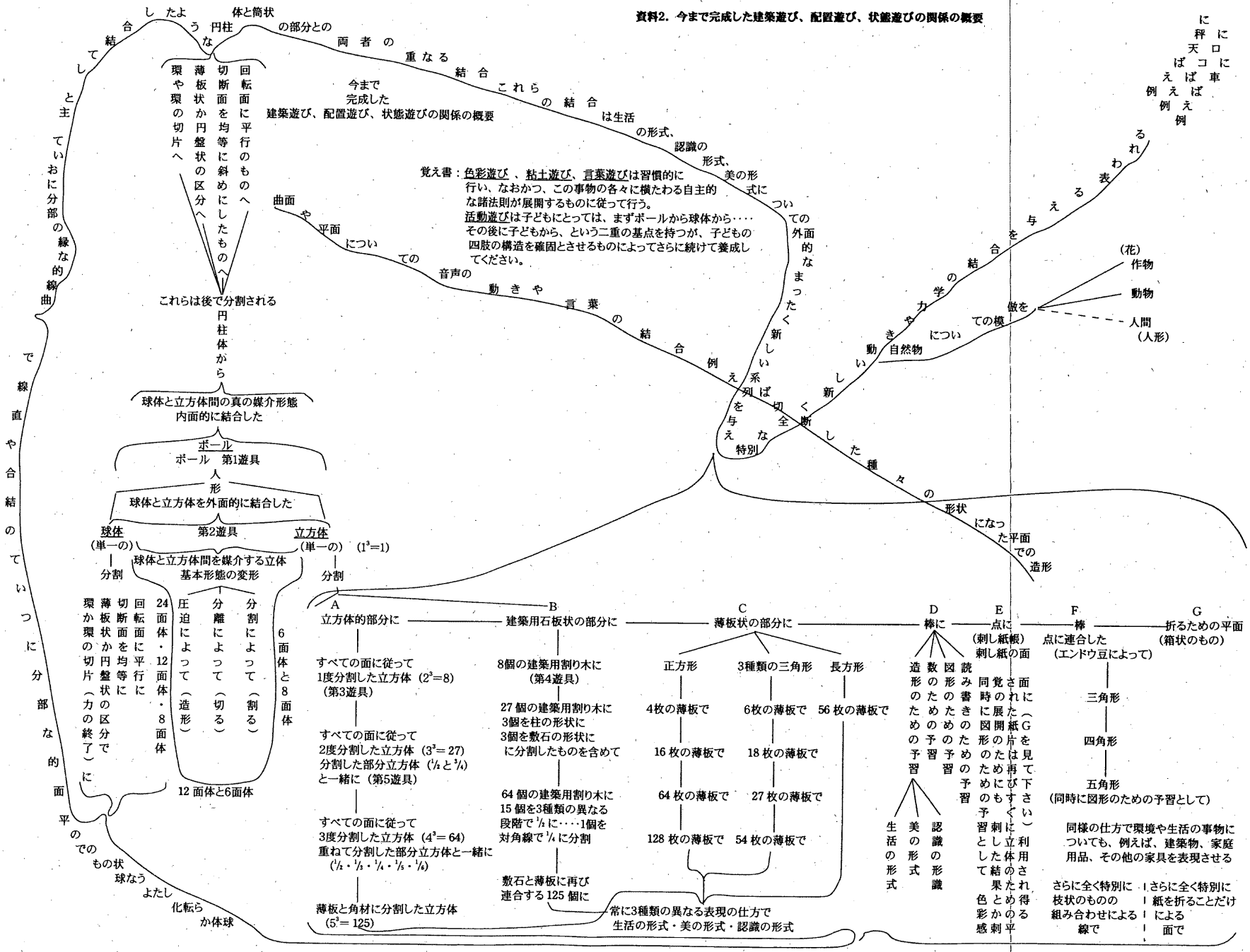
30. *Unbestimmte Entwurfsfragmente über die Spiel= und Beschäftigungsmittel*
Friedrich Fröbel : Nachlaß Friedrich Fröbel 59 : Akademie der pädagogischen Wissenschaft der DDR : 1837

31. Wie Lina schreiben und lesen lernt. Eine schöne Geschichte für Kinder, die gern thätig sind
Friedrich Fröbel : In : *Friedrich Fröbel's Wochenschrift. Ein Einigungsblatt für alle Freunde der Menschenbildung* : Nachlaß Friedrich Fröbel : Friedrich Fröbel Museum. Bad Blankenburg : Der
Kinderbeschäftigungs Anstalt, früher in Blankenburg, jetzt in Bad Liebenstein bei Eisenach : 1850 :
Nr. 17. Montag, den 29. April 1850

資料1. 今まで大部分完成したフリードリッヒ・フレーベルの遊具箱と作業箱、作業具の全体的概要



資料2. 今まで完成した建築遊び、配置遊び、状態遊びの関係の概要


今まで
完成した
建築遊び、配置遊び、状態遊びの関係の概要
覚え書：色彩遊び、粘土遊び、言葉遊びは習慣的に行い、なおかつ、この事物の各々に横たわる自主的な諸法則が展開するものに従って行う。
活動遊びは子どもにとっては、まずボールから球体から・・・・その後に子どもから、という二重の基点を持つが、子どもの四肢の構造を確固とさせるものによってさらに続けて養成してください。
円柱体と筒状の部分との両者の重なる結合
これらの結合は生活の形式、認識の形式、美の形式についての外面的なまったく新しい系列を与えない特別な全く新しい種々の形状になった平面での造形
曲面や平面についての音声の動きや言葉の結合例
例えば切断した
例えば車
例えばコロに
例えば天秤に
例えば
例
回転面に平行のものへ
切断面を均等に斜めにしたものへ
薄板状か円盤状の区分へ
環や環の切片へ
これらは後で分割される円柱体から
球体と立方体間の真の媒介形態
内面的に結合した
ボール
ボール　第1遊具
人形
球体と立方体を外面的に結合した
第2遊具
球体
(単一の)
立方体
(単一の)　(1³=1)
分割
分割
球体と立方体間を媒介する立体
基本形態の変形
分割によって（割る）
分離によって（切る）
圧迫によって（造形）
6面体と8面体
24面体・12面体・8面体
回転面に平行に切断面を均等に薄板状か円盤状の区分で環か環の切片（力の終了）に
12面体と6面体
線直や合結のていつに分部な的面平のでのもの状球なうよたし化転らか体球
結合してしたように円柱
と主ていおに分部の縁な的線曲で
A
立方体的部分に
すべての面に従って1度分割した立方体（2³=8）（第3遊具）
すべての面に従って2度分割した立方体（3³=27）分割した部分立方体（½と¾）と一緒に（第5遊具）
すべての面に従って3度分割した立方体（4³=64）重ねて分割した部分立方体と一緒に（½・⅓・¼・⅕・⅙）
薄板と角材に分割した立方体（5³=125）
B
建築用石板状の部分に
8個の建築用割り木に（第4遊具）
27個の建築用割り木に3個を柱の形状に3個を敷石の形状に分割したものを含めて
64個の建築用割り木に15個を3種類の異なる段階で½に・・・・1個を対角線で¼に分割
敷石と薄板に再び連合する125個に
C
薄板状の部分に
正方形
3種類の三角形
長方形
4枚の薄板で
6枚の薄板で
56枚の薄板で
16枚の薄板で
18枚の薄板で
64枚の薄板で
27枚の薄板で
128枚の薄板で
54枚の薄板で
常に3種類の異なる表現の仕方で
生活の形式・美の形式・認識の形式
D
棒に
造形のための予習
数のための予習
図形のための予習
読み書きのための予習
生活の形式
美の形式
認識の形式
E
点に
（刺し紙帳）
刺し紙の面
同時に図形のための予習として
覚えた面に展開されたG（紙片を見て下さい）
色彩感覚
刺し立体の結果
利用されたために再びすぐ
とかの平面
得る
F
棒
点に連合した
（エンドウ豆によって）
三角形
四角形
五角形
（同時に図形のための予習として）
同様の仕方で環境や生活の事物についても、例えば、建築物、家庭用品、その他の家具を表現させる
さらに全く特別に枝状のものの組み合わせによる線で
さらに全く特別に紙を折ることだけによる面で
G
折るための平面
（箱状のもの）
ばコに
車
例
例
例